

# モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター



環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2013年夏号

## 2013年春期の結果速報

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の速報について、これまで冊子として出していたがとりまとめに時間がかかっていたため、速報の概要をニュースレターとして作成し今回以降報告していきます。

7月10日までに集計できた114サイトの春の調査結果を基に報告します。なお、データは速報値ですので、今後精査を進めた後、調査報告書を改めて作成します。

### 最大個体数は増、湿原・干潟の種は減

全てのサイトの最大個体数の合計をモニ1000の始まった2004年から2013年までグラフにしました(図1)。これを見ると個体数は、昨年春(112サイト参加)から3,593個体増加し、104,138個体(未同定種を除く)となっています。では、その内容を今年春の種構成の上位5種で見ると(図2)、ハマシギは例年通り最も個体数が多い種でしたが、2番目にはアカエリヒレアシギが入っていました。ヒレアシギ類は海上生活者と考えられ、天候が悪化した場合などに陸域の湿地で多数観察されることがあるのですが、年による変動

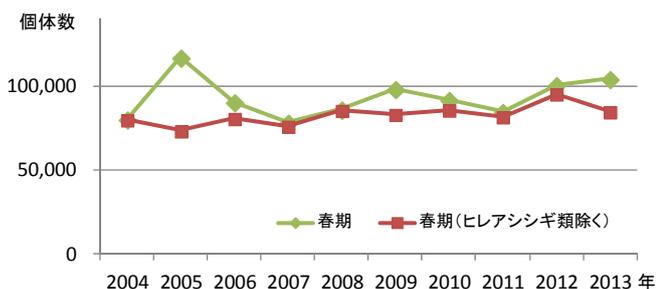
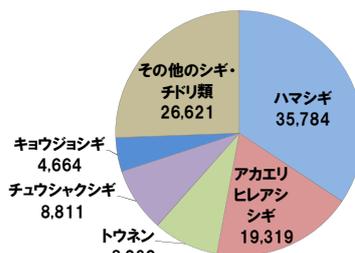


図1. 春期調査の全サイトの最大個体数合計とヒレアシギ類を除いた合計の推移。不明種は含まない。



アカエリヒレアシギ

図2. 2013年春期調査の上位5種。数値は個体数。

が非常に大きい種群です。今年度は多い年のようで、昨年の4倍近い最大個体数が記録されました。そのため、ヒレアシギ類を除き、一般的に湿原や干潟を利用する種の最大個体数を図1に赤の凡例で示しました。これを見ると、昨年春に比べ減少傾向となり、個体数にして15,000羽ほど減少していました。

また、春期調査に10年連続で参加している69サイトのみで同様のグラフを作成しました(図3)。昨年と比べ、全体で増加していますが、ヒレアシギを除いた値は、ほぼ昨年と同じ値となりました。

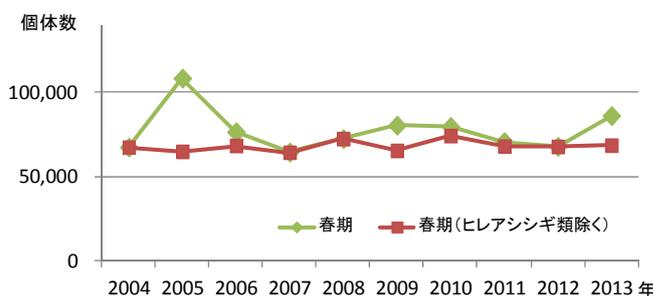


図3. 春期調査が継続している69サイトの最大個体数合計とヒレアシギ類を除いた合計の推移。不明種は含まない。

### 各種の増減率

次に、種別に2012年春調査と比較した表を示します(表)。対象としたのは昨年も春期調査に参加した108サイトです。最大個体数の合計が2倍以上確認された種は、アカエリヒレアシギ(3.8倍)の他、オバシ

表1. 2012年春と2013年春の調査に参加した108サイトの最大個体数の合計と増減率。2012年を“1.0”として増減率を表記。青色は昨年よりも減少した種。2013年に50個体以上確認されている種を対象とした。

	2012年	2013年	増減率		2012年	2013年	増減率
ハマシギ	37925	35754	0.9	タシギ	281	395	1.4
アカエリヒレアシシギ	5119	19319	3.8	セイタカシギ	197	381	1.9
トウネン	16820	8742	0.5	タカブシギ	141	367	2.6
チュウシャクシギ	9575	8658	0.9	ケリ	277	273	1.0
キョウジョシギ	5213	4538	0.9	イソシギ	210	254	1.2
キアシシギ	4097	4361	1.1	ホウロクシギ	187	160	0.9
ムナグロ	3877	3941	1.0	コアオアシシギ	49	129	2.6
ダイゼン	3092	3119	1.0	ウズラシギ	200	102	0.5
ミュビシギ	1783	2375	1.3	コオバシギ	13	15	1.2
オオソリハシシギ	2488	2350	0.9	ハイロヒレアシシギ	110	73	0.7
メダイチドリ	1623	2098	1.3	オオメダイチドリ	38	68	1.8
オバシギ	709	1741	2.5	ダイシャクシギ	147	68	0.5
アオアシシギ	1322	859	0.6	アカアシシギ	37	64	1.7
シロチドリ	920	811	0.9	ツルシギ	106	64	0.6
ソリハシシギ	607	625	1.0	コシャクシギ	3	58	19.3
ミヤコドリ	492	557	1.1	オグロシギ	46	54	1.2
コチドリ	417	417	1.0				

ギ(2.5倍)、タカブシギ(2.6倍)、コアオアシシギ(2.6倍)、コシャクシギ(19.3倍)が挙げられました。オバシギは、関東太平洋沿岸、伊勢三河湾、瀬戸内海沿岸、九州での記録があり、特に瀬戸内海沿岸の四国で昨年より多い傾向がありました。コシャクシギは、草地・農耕地での観察記録が多く、湿地を主な対象としたモニ1000の調査ではあまり記録されませんが、この春は泡瀬干潟で41個体の記録があり、これは記録上最大の個体数でした。

逆に、昨年春と比較して減少が大きかった種は、ダイシャクシギ(0.5倍)、ウズラシギ(0.5倍)、トウネン(0.5倍)、ツルシギ(0.6倍)、アオアシシギ(0.6倍)が挙げられました。特にトウネンは、例年個体数が多いので影響が大きいのですが、藤前干潟で昨年より数が増加した一方、北海道、東北などで渡来期が遅れ、個体数が少ない傾向がありました。ただ、毎年多くのトウネンが記録される北海道風蓮湖での観察条件が恵まれなかったため、未同定種が記録されており、この辺りを考慮に入れた分析が必要と考えられます。また、内陸部の湿地で観察されることの多いタ

カブシギ、アカアシシギ、セイタカシギが増加した一方で、ウズラシギやツルシギが減少をしているのも気になるところです。

### 絶滅危惧種の記録

今年春、調査サイトでは、ヘラシギの記録がありませんでした。モニタリングサイト1000調査での確認率は例年あまり高くはありませんが、毎年1～3個体ぐらいいは記録されていました。東アジアでの個体数減少が懸念されているだけに心配されます。

表2. 2013年春に観察された絶滅危惧種と最大個体数。

第4次レッドリスト 環境省 2012年8月	種名	2013年春期 最大個体数
絶滅危惧 I A類 (CR)	ヘラシギ	0
	カラフトアオアシシギ	2
絶滅危惧 I B類 (EN)	コシャクシギ	58
絶滅危惧 II 類 (VU)	シロチドリ	814
	セイタカシギ	398
	オオソリハシシギ	2,358
	ホウロクシギ	162
	ツルシギ	64
	アカアシシギ	64
	タカブシギ	396
	タマシギ	15
	ツバメチドリ	7
準絶滅危惧 (NT)	オオジシギ	24
	ハマシギ	35,784

## モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター 2013年 夏号

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史 電話/Fax: 042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp